

11

特集 22の症例でみる注入治療

脂肪注入療法

市田正成

いちだクリニック 院長

加齢によって、人の顔面はシワ、凹み、たるみを生じる。抗加齢の対策として最初に登場したのは、フェイスリフト手術であった。次にはシワを消すために、コラーゲン注射そしてヒアルロン酸注射が登場した。そして最後に顔の凹みを解消するために、美容外科医が思いついたのは脂肪注射であった。ただし、脂肪注入術は予想以上に結果が伴わず、断念する医師が続出した。しかし、筆者は試行錯誤の結果、効果的な成果を上げることも不可能ではなくなった。ここでは、筆者が行っている効果的な脂肪注入法について解説する。

はじめに

顔面への脂肪注入術は、メスを使わないでできる顔面の若返り手術であり、外科的手術とフィラー注射の中間的な位置を占める。日本で脂肪注入術が始まった1988年ごろは、脂肪幹細胞はまだ発見されておらず、そういう概念がない時代であり、脂肪細胞は成人では数が一定していて、増殖はしないということが定説となっていた。そのような時代から筆者は脂肪注入術を手掛け、顔面ならびに胸部の脂肪注入について工夫や改良を重ねてきた。ここでは顔面への脂肪注入について、現在行っている方法を以前の方法との比較も加えながら解説する。

適応と禁忌

適応

- 基本的にはほとんどの部位に脂肪注入は可能である。
- 領域区分：前額部、上眼瞼部、下眼瞼下部、頬部、こめかみ部、鼻根部、ほうれい線、マリオネットライン、おとがい部といった部位であるが、各領域によって、効果のほどが違う。

禁忌

- 上眼瞼部の睫毛に近い瞼板部位は脂肪注入すると皮膚に隆起が目立つため、脂肪の注入は不適であるが、それ以外の部位にはとくに禁忌という部位はない。

- ニキビ、毛囊炎など、皮膚に化膿性炎症が存在する部位には脂肪注入してはいけない。

術前計画と
インフォームド・コンセント

問診

まずは患者がどの部位の改善を望んでいるかを聞き出す。

治療方法の選択

脂肪注入を行うか、他の注入法にするかの選択、脂肪注入が最適と思われる場合は積極的に勧める。

術後合併症

術後の合併症は、まれにしか起きないが、可能性は説明しておく必要がある。

腫脹

程度の差はあるが必ず起こる。ほとんど1週間以内に不自然な腫脹は消失する。

硬結

脂肪注入部位は術後1、2か月は通常硬結として触れる。しかし、3か月を過ぎると、皮下脂肪層に注入した生着脂肪はあまり硬結としては触知できなくなる。ただし、眼輪筋部位のように柔らかい筋層部位は生着脂肪が硬結として触れることが多い。これは注入脂肪が筋層内で生着した状態であり、外観上目立つふくらみがないかぎりやむをえない。

皮下出血斑

脂肪注入時に皮下出血が多い場合には起こりうる。また、ほうれい線部位のように、脂肪注入の際、皮下を剥離した場合には皮下出血斑が生じるのはやむをえない。

血腫

皮下の太い血管を針が傷つけた場合、止血するまでしっかりと圧迫しないと血腫を形成する。注入針を先に進めるのが速すぎると、太い血管を刺傷する可能性が高くなるため、注射針をゆっくりと進めることが最も重要である。

凹凸不整の外観

脂肪注入の層が浅すぎた場合や、1か所に多くの脂肪が入り過ぎた場合に起こりうる。水平注入法で生じた場合は吸引して取り除かないと修正できない。垂直上方注入法で浅く入った場合には、術中にすぐに圧迫すると、注入脂肪がほどよく深層に移動するため、隆起は目立たなくなる。

嚢腫形成

1か所に多くの脂肪が注入されすぎると(0.2cc以上)、外側の脂肪は生き残り、内側は融解してオイル状となりいわゆる嚢腫を形成する。穿刺または摘出が必要となる。

違和感

顔面への脂肪注入をした後は、2か月くらいは多少の違和感がある。針が知覚神経を傷つけた場合は数か月は痛みを覚えるが、ほとんどの場合にいずれ消失する。

脂肪の不生着

注入脂肪がすべてなくなってしまったと訴える患者がいるが、実際にはすべてなくなることはなく、なくなったように思えるくらい減少してしまうということである。術後のケア(安静と冷却)に問題があることが多い。

脂肪の過生着

原因は2つある。①注入脂肪の量が多すぎた場合と、②術後急激に太った場合である。

注入脂肪は体重の増減に関して、ドナーの皮下脂肪と同じ経過をたどるため、術後ちょうどよいくらいよりもは